

# 支援センターたより No.16

2023年12月5日

発行:太平洋核被災支援センター

<http://bikini-kakuhisai.jet55.com>

事務局 宿毛市山奈町芳奈2779-2 山下正寿

<masatosi.sky@orange.zero.jp>

## I. 太平洋核被災支援センター・総会 開催

6月22日(木)、太平洋核被災支援センター・総会が高知城ホールと山下家とをオンラインで結び、開かれました。(2022総括・決算、2023活動計画・予算については、たよりNo.15で掲載済み)

### 2022 総括・決算を提案

初めに、太平洋核被災支援センター・事務局長、山下正寿氏が基調提案しました。「昨年は幾つかの前進がありました。一つは、室戸の取り組みです。室戸では、若い世代を中心としたフィールドワークなど学習交流活動や元船員・遺族を支える昼食会などのとりくみを地域活動として行っています。

また、高知の「ビキニデー in 高知 2022」全体集会で、高橋博子さんによる「核兵器禁止条約発効の時代に生きる世代へ」と題する講演、幡多ゼミOBと若者が「核時代と私と未来」と題したシンポジウムで学び体験の交流などが行われ、延べ320名が参加、ビキニ問題を大きく広げることができました。

もう一つは、幡多を中心に行われている被災者・遺族への年末支援です。全国の支援者からの心からのお見舞いとして大変感謝されています。

さらに、太平洋核被災支援センター・役員による東京、広島、北海道での講演、その他の会合でのオンライン報告などで県外、他組織への広がりが生まれていることも特筆できます。」

基調提案を受けて、多くの方が補強意見として発言しました。共同代表の濱田郁夫氏は、室戸では継続的に高知大生と室戸市役所青年職員によるフィールドワークや学習交流活動を行ってきたことや元船員・遺族との交流会を昼食会として実施するなど、地域に根ざした活動が広がっていることを報告しました。

次いで、副代表の岡村啓佐氏は「ビキニデー in 高知 2022」について、若い世代を育てながら彼らを中心に運営し、次世代への継承という点で画期的だったと発言しました。また、ビキニ被災者船員訴訟支援募金をクラウドファンディングでとりくみ、549万5千円の



支援センター事務局会

全国支援をいただくことができた、と報告しました。

### 2023 活動計画・役員・予算を提案

山下氏は活動計画の中でも、次の2点を特に課題として強調しました。「一つは、これまでの教材作成が高評価をえており、さらに学校現場で使える核被災学習資料が求められています。研究協力者と研究を進め、本・DVD・絵本・紙芝居・資料集など「地域探求」教材として学校での活用を進めます。

もう一つは、国の開示資料や被災者記録を整理し、DVD・報告書にまとめ普及し、被災船員救済の資料としても活用します。被災者記録として、ビキニ被災者健康資料の分析、活用が重要になっています。」

そして、活動計画に、7.「高知・幡多ゼミOB会」の活動や「高知・幡多探求ゼミ」(仮)結成を支援する。を加えました。役員は新年度も継続ですが、研究協力者として笹島康仁氏が加わりました。

### 満場一致で議決

最後に、2022総括・決算、2023活動計画・役員・予算を議決、満場一致の拍手で採択されました。

## II. 全国高校生平和集會に、ゼミOBがオンライン参加

8月8日、全国高校生平和集會の要請で、幡多ゼミOBの橋崎律子さんがゼミ活動から得たものや高校生へのメッセージをオンラインで報告しました。



橋崎律子さん

## 第50回 全国高校生平和集會に寄せて メッセージ 幡多高校生ゼミナール 0B 橋崎律子

第50回全国高校生平和集會の開催、おめでとうございます。幡多高校生ゼミナール0Bの、橋崎律子と申します。昭和46年生まれの51歳。みなさんの親世代より少し上といったところでしょうか。ちょうど33年前の高校3年生の夏、長崎市で開かれた全国高校生平和集會に参加しました。全体会では、幡多ゼミの仲間が広げた大漁旗をバックに、私が代表し発言。「幡多ゼミは“足元から平和と青春を見つめよう”をモットーに、地域に根差した平和学習をしていること」「私たちの調査により、第五福竜丸のように、高知県にも多くのビキニ被災漁船がいたこと」「漁船員は今でも被爆による健康被害に悩み、被爆者手帳の交付を求めていること」等を報告しました。この時は緊張のあまり、発言の途中、何度も噛んだことを思い出します。分科会では、全国の仲間の活動報告や意見を聞き、“同じ高校生なのに、すごいしっかりしてるなあ”と感心。交流会では、「ケサラケサラ」「陽気に生きようこの人生をさ」「ヒロシマのある国で」等、ギターを弾く高校生もいて、みんなで歌ったり踊ったり。原爆投下時刻の「ダイ・イン」では、地面に腹ばいになり、日差しも地面も熱かったこと等を思い出します。

幡多ゼミの活動で、一番よかったことは、他の高校の生徒と知り合え、話し合え、気兼ねなく言いたいことを言い合えたということです。社会のこと、平和のこと、今後の生き方などなど。お互い真剣なあまり、時には涙ながらに激論を交わすこともありました。顧問の先生方も生徒の話真剣に聞き、温かく受け止めてくれました。学校の成績はそこそこの私にとって、ゼミは居場所であり、ゼミの仲間と会いに学校へ行くようなものでした。

二つ目に、ゼミの活動を通して、社会背景を意識してみるようになり、社会科の勉強がおもしろくなりました。今の自分に社会はどう影響しているのか、平和とは何かを考えるようになりました。ある時、小論文の演習で、「核兵器について」を書くことがあり、自分のゼミ活動の体験を書きました。その中で、「ビキニ環礁等の核実験による被災は、戦争そのものではない状態で起こった。つまり“戦争準備の段階でも、核被災などの被害がでる。だから戦争をしてはいけないんだ”ということに気づき、ハッとしたことを、今でも覚えています。自分の体験に基づく感想というのは、その人の言葉であり、説得力があります。みなさんにも、自分の体験から得た思いと言葉を、大事にしてほしいです。それから、ゼミ活動の中で、「加害者、被害者、抵抗者の3つの視点が必要」ということを学びました。例えば、戦争にしても、加害の事実、被害の事実を知ることと同時に、戦争に抵抗した人の生きた方も知ることです。戦争に限らず、日常生活の中でも、不条理なことがいっぱいあるけれど、「ああ、問題を全て自分だけで背負うことはない。解決に向け努めているのであれば、自分を責めなくていいんだ。」と、平和のことを考える上でも道筋が見えたような気がして、どこか、ホッとしたことを覚えています。

三つ目に、ビキニ被災事件を掘り起こす手助けができたことです。1954年3～12月までに、汚染マグロを廃棄した延べ1000船の被災漁船が北海道から沖縄まで太平洋岸すべての都道府県で見つかっています。そして、2017年7月、国連の核兵器禁止条約第6条に、「戦争行為だけでなく、準備や核実験による被害も救済の対象に含む」という文言が入りました。これは、ビキニ被災漁船員を始め、マーシャル諸島での核実験被害者が長年訴えてきたことが実ったものです。核兵器廃絶に向け、少しでも役に立ててうれしいし、自分が幡多ゼミでしてきたことに、意義が見いだせたように思いました。

それでは、高校生のみなさん、集會では仲間同士、自由闊達にそして率直に、大いに語り合ってください。みんなの前で自分の意見を一つでもいいから、言ってみてください。それが、今後の自信につながります。また、私からのお願いですが、先生方、スタッフのみなさん、高校生が言うこと、思うことをそのまま受け止めてください。時にはヒヤヒヤすることもあるかと思いますが、どうぞ温かく見守ってください。よろしくお祈りします。

今回の集會が、みなさんの今後の人生を豊かにするものとなるよう、心から願っています。

### Ⅲ. 坂手氏、市田氏、幡多フィールドワーク

8月22日(土)～23日(日)、脚本家で劇団「燐光群」主宰の坂手洋二氏と第5福竜丸平和協会事務局長の市田真理氏が来高し、幡多フィールドワークを行いました。それは、12月高知公演の演劇「わが友第5福竜丸」の先駆けに8月24日、坂手、市田両氏のトークショーが行われます。その事前調査として、第5福竜丸以外の被災船・被災者について取材しました。



節弥さん、馬さんの墓参(手前が市田さん、奥が坂手さん)

写真提供：吉良さん

両氏は前県議・吉良富彦氏の車に同乗し、22日昼過ぎ、幡多ゼミナール館に到着。山下正寿氏が幡多ゼミの成り立ちや地域調査、ビキニ被災問題の課題などについて説明、上岡橋平氏がゼミ生の互いに本音をぶつけることで成長する様子を補足しました。

その後、内外ノ浦で藤井節弥さん、馬さんのお墓詣り、宿毛市のホテルでゼミ 0B の橋崎律子さんから聞き取り、居酒屋で山下氏、今城隆氏とともに夜学、夕食交流を行いました。

翌 23 日は今城氏、前田氏とともに被災漁民を訪問、下川口で谷脇寿和さん、土佐清水で横山幸吉さんの聞き取りを行いました。また、「震洋」特攻隊基地跡や万次郎記念館、窪津、松尾漁港、足摺岬を見学、カツオ・マグロ漁業の発展とビキニ被災の実態を肌を感じてもらえたのではないかと思います。

フィールドワークのお世話をした方々、また、24 日のトークショーを含め、空港への送迎、全ての工程を同行し案内した吉良さん、本当にご苦労様でした。

#### IV. 高知県史編纂現代部会のメンバー、幡多ゼミナール館で取材

8 月 30 日（水）県史編纂現代部会の委員 8 名と事務局員 2 名がゼミ館を訪問、幡多ゼミの活動やビキニ被災、朝鮮人の強制連行問題など地域の近現代史について、山下正寿氏に聞き取りを行いました。高知県として県史を編纂する上で、ビキニ被災や強制連行問題などは必須の歴史事実として記録する必要があるとの、認識によるものです。

まず、山下氏から、幡多ゼミが長崎・ビキニで被ばくし、病気を苦に自死した青年、藤井節弥さんの母親・馬さんから聞き取りを始めたこと、さらに県全体のビキニ被災実態やゼミ生の活動を説明しました。次いで、上岡橋平氏は強制連行問題への取り組みの契機、表現活動やゼミ活動がゼミ生を成長させた教育効果について補足しました。

現代部会では名簿など一次資料を収集し、まずビキニ被災の資料集を刊行する予定です。

その他、部会のメンバーは西土佐・十和の満蒙開拓団や土佐清水市の生涯学習課市史編纂室長の田村公利氏から新地域資料などを聞き取りしています。

#### V. 県主催ビキニ被災者健康相談会

11 月 7 日、8 日、高知県主催のビキニ関連健康相談会が室戸市と土佐清水市で行われ、内容は、両市とも県の挨拶、講話、個別健康相談の流れで実施されました。参加者は室戸市が元船員 3 人、その妻 1 人、支援者 2 人の計 6 人、土佐清水市が元船員 4 人、支援者 4



支援センターによる生活相談（土佐清水）

人の計 8 人でした。

室戸市では、県健康対策課課長・川内淳文氏が講話で「高知県にも核実験で被災された方は数多くいる。元船員や遺族の方々の不安に寄り添う形で継続していきたい」と挨拶、高知大学医学部教授で副学長の菅沼成文氏が「Facebook で愛吉・すずのバラを見た。第五福竜丸をはじめビキニ被災事件については色々な物語で受け継がれている。元船員に日焼け、下痢や嘔吐などの初期症状があるのはかなりの線量の被ばくがあったと考えられる。」と話しました。

土佐清水市では、挨拶、講話の後、元四万十診療所医師・佐沼興一氏によって一人一人の健康相談がされ、その合間に、太平洋核被災支援センター事務局員が手分けして生活相談を行いました。94 歳の横山幸吉さんは病気がちだが「料理は自分で作る。野菜は畑で 7 種類作っていて、今日は生ネギ 300 本を植えてきた。毎日、新聞も読む。」と誇らしげに語ってくれました。また、谷脇壽和さんは「今日は、皆さん集まってくれて感謝しています。これで切らずに続けてください。」と発言しました。

今回の健康相談会は看護師さんによる家庭訪問の約束という成果がありました。しかし、元船員を車で搬送するなど太平洋核被災支援センターの協力があって実現できたともいえます。実際、幡多では会場までの移動が困難な元船員が多く、県委嘱の医師が家庭訪問する方式にできないか、などの課題があります。

#### VI. 40 周年幡多ゼミ 0B 会

11 月 11 日（日）、ゼミ 0B14 人、その子ども 4 人、顧問 3 人、計 21 人が幡多ゼミ 40 周年を祝いました。

0B の幹事さん、橋崎、津野両人は何度も打合せてチラシの作成、ラインなどでの参加呼びかけ、買い物など奮闘してくれました。直前の打合せで、準備からの

参加者には栗ご飯にツガニ汁をふるまおうと決めると、何と、ほとんどのOBが朝から参加、ご馳走に舌包みを打ちました。ツガニ汁に「美味しい!」「味が濃い」。栗ご飯にも驚きの声が「栗の中にご飯があるー!」贅沢の極みでした。

お腹が一杯になった後は、ゼミ館2階へ。当時の写真、本、パンフレットを前に、当時のビキニ調査、日韓交流を報道したTVニュースを録画したDVD2本を上映しました。あの頃の自分や友だちの姿に何度も歓声が上がりました。

顧問の山下正寿氏が「活動を振り返って～現在の状況」と題してミニ講演、40年間を回顧しました。

「幡多ゼミ誕生から40年、再び幡多ゼミが注目されています。それは、全国の高校生や平和ゼミの活動は多くが私立学校を中心に展開されています。幡多ゼミは公立高校を中心に国際的視野で地域の現代史発掘と交流活動を継続しました。なぜ、公立でこれだけの自主活動ができたのか、というわけです。

1983年幡多ゼミは沖の島強制疎開調査で誕生し、85年戦後40年の節目に、地域の被爆者探しの中で、ビキニ被災者と遭遇、「第5福竜丸だけではなかった多くのビキニ被災船」と教科書を書き換えるほどの真実を掘り起こしました。活動は本・映画「ビキニの海は忘れない」に収録され、多くの反響をよびました。

その後、更なる新事実の解明や公文書の発見により、ビキニ被災者救済のために東京と高知で裁判を闘っています。また、国連で核兵器禁止条約が発効した現在、核被害者の救済という点でも国際的に注目されています。

90年からの朝鮮人強制連行調査では地域の歴史を掘り起こし日韓交流を実現、本・映画「渡り川」は日韓交流のあるべき姿を提起したと脚光を浴びました。95年には韓国光復節50周年記念式典に招待されました。釜山の高校生との交流は訪韓6回、幡多に迎えたのが6回と親睦を積み重ね、津賀ダムや柏島には犠牲者を供養し、日韓親善交流を願って共同でモニュメントを造りました。

これまで、幡多ゼミ関連の書籍は7冊を数え、2022年には写真記録「核被災に向き合う高校生たち」を出版しました。

現在、幡多ゼミは高校生だけでなく、中学生や大学生、地域の青年も参加できる『幡多探求ゼミナール』



乾杯!



ソーレ!  
ソーレ!

にグレードアップすべく準備を進めています。皆さんもぜひ参加してください。」

次いで、OBがそれぞれの思いを語りました。

○大月分校の生徒が作った人形劇「トビウオのぼうやと、真っ白船」を見て衝撃を受け、ゼミ活動に飛び込んだ。とにかく面白かった。

○映画作りや平和の旅など、高校生でもできることがあると体感できたことがたくさんあった。色々あった高校だが、楽しい高校生活にしてくれた。

○自分は、高校が合っていないと悩んでいた時期にゼミに出会った。おかげで居場所を見つけ、生き方や進路を考えることができた。

○僕もそうだが、娘がゼミでお世話になった。特に広島での全国高校生平和集会に参加したことが印象に残っているようだ。

○ゼミでの多様な経験が私の物の見方、考え方の根底にある、と思う。

○私は中学で教員をしている。なので、改めて顧問の先生方の凄さを感じる。幡多ゼミでの経験を平和教育など自分の生徒に生かしていきたい。

休憩後、ゼミ館の庭で焼き芋やお菓子を食べましたが、おしゃべりが止むことはありませんでした。ドラム缶の火を囲み、杉村真由紀さんの音頭で幡多ゼミ関係の歌を声が枯れるまで歌い踊りました。「黒潮に平和を」「友情の川」「海光るとき」「ケサラケサラ」などなど。

集合写真を撮り、閉会の挨拶が終わっても去りがたく、別れがたい時間が続きます。火の周りでしばし、その後駐車場でも輪になって、そこにはかけがえのない仲間との別れを惜しむ姿がありました。